

## 行為の社会学の理論について

小 関 藤 一 郎

### 1

フランスの社会学は最近大学における講座数が増設されたり、すでに別のところで<sup>(1)</sup>報告したように、研究所の設置や研究員制度の実施などによって著しく活発な動きを示している。しかも1958年からは大学で社会学を専攻したものには学士号 *licencié de sociologie* が授けられるようになったのである。この年1958年はフランスの大学で正式にはじめて社会学の講義を開始したデュルケーム E. Durkheim の100年祭にあたった。だからデュルケームがはじめてボルドオ大学で講義を担当してから70年余りで社会学の地位は著しく成長したのである。このような制度的の面ばかりでなく学者の活躍にも注目すべきものが少なくない。その活動は非常に多方面にわたっているばかりではなく戦前の社会学とは大きく異った方向をとってきている。とくに若い世代の学者の試みには従来の枠をとびこえ、しかもアメリカ社会学の成果を吸収しながらそれをのりこえていこうとする新しい大胆ともいえる企てが看取されるのである。そうした新しい試みのうち注目すべきものここにとりあげるトゥレーヌ A. Touraine の行為主義の理論 *théorie actionnaliste* がある。<sup>(2)</sup> トゥレーヌは現在パリ大学ナンテール分校で教鞭をとっているが、アロン R. Aron 教授、カズヌーヴ J. Cazeneuve 教授、ステゼル J. Stoetzel 教授やレヴィ・ストース Lévi-Strauss などの大家よりは一世代若い学者の代表である。トゥレーヌは1925年生れであるがフランス学界の秀才を伝統的に輩出している *Ecole Normale Supérieure* 出

身のノルマリアン *normalien* で1950～58年パリの社会学研究所 *Centre d'Etudes sociologiques* で研究したのち、*Ecole Pratique des Hautes Etudes* の *directeur d'études* として活躍したが、そこに産業社会学研究所 *Laboratoire de sociologie Industrielle* を創設しその所長を兼ねている。<sup>(3)</sup> トゥレーヌはこの研究所の所員約30人の研究の指導を行う一方、新しい社会学の理論的基礎づけを行ってきている。彼はその理論を *actionnalisme* と称しているが、1965年に公刊された著書 *Sociologie de l'Action* においてその方法論を展開したばかりでなくその方法を用いて現代産業社会を *Système d'action* として分析を行って来ている。ところで、トゥレーヌのこのような社会を一つの *Système d'action* として捉える試みはパーソンズ T. Parsons の行為の理論を想起せしめるのであるが、トゥレーヌの企ての狙いは正しくパーソンズの理論に対する挑戦でありそれを克服しようとするにあるのである。彼はいう、パーソンズの構造機能分析といわれる接近法は余りにも静的であって真に社会の変動を解明することはできないものであると。だから静的な構造機能的分析に代るものとであり、かつ真に動的な分析として *actionnaliste* の理論を提唱するのであるが、それが動的であるのは、それが基本的には社会における価値をただ指定する (*poser*) だけでなく価値の創造の問題を解明することによって真に価値を説明することができるからなのである。この企ては従来の構造機能分析からすると大きな飛躍であるが、トゥレーヌによるとそうした試みは産業社会 *sociétés industrielles* の発展

(1) 拙稿「フランス社会学の現況」ソシオロジー第42号(昭42年)

(2) トゥレーヌについてすでに拙稿「フランス産業社会学の動向」「日本労働協会雑誌昭41年4月号」に若干ふれたが、そこでは産業社会学の問題だけに言及しただけである。

(3) トゥレーヌと同年代で活躍している社会学者には *Michel Crozier*, *Serge Mallet* などがある。

からみて必然的のものであると考えられるのである。とくに産業社会の発展の中で次の二つの事実<sup>(4)</sup>が注視されなければならないのである。

その一つは西欧の先進産業社会において経済発展が漸次人間の意図的な計画に従って行われてきている事実である。フランスも第二次大戦後計画化 Planification をすすめているが、西欧諸国においては、今や経済発展を主要目標とされているばかりでなく、それを正当性の原理として認めるようになってきており、そこに計画化の導入は不可欠だという認識が強くなり一般化している。第二は、おくれた工業化の途についた開発途上の国々においては生産と生産の成果あるいは意志決定への参加との間のズレは全く経験されていないという事実である。開発途上国の社会においては経済発展はその出発点なのではなく、むしろ政策や社会運動の結果として存在しているのである。<sup>(5)</sup>このような状態においては、社会の機能がどうなっているとか社会の変動がどうという風にだけ考えることでは充分ではないのであって、真の反省的思考はその本質的な対象として社会の発展、その存在意志、社会がその行為領域を限定し構成していく仕方を問題とせざるを得なくなるのである。このような事態の発展にともなって、社会学も歴史から分離し、社会的行為 action sociale の方向を史的発展の中に求め、探究するようになることは少くなるのである。そこに主体的な行為主義的分析 analyse actionnaliste が強調される所以が存在するのである。

## 2

トゥレーヌ A. Touraine は行為主義的分析 analysi actionnaliste が産業社会においてより多くの妥当性をもつと知っているが、この分析の原理は一体何なのであろうか。トゥレーヌは彼の析

を主体的 analyse subjectale ともよんでいる。その特質はどこにあるのであろうか。もともとトゥレーヌもパーソンズと同じく社会的行為 action sociale を分析の出発点とするのであるが、トゥレーヌにおいては社会的行為は社会的慣行 conduite sociale とは区別されるのである。それは次の三つの点によるのである。<sup>(6)</sup>(1)社会的行為は一定の目的に志向するものであることは明かなことであるがこの志向はたんに個人の意志という面からだけ解されるものではない。(2)社会的行為は行為者が社会関係 rapports sociaux の中におかれていることによってはじめて可能なのである。(3)社会的行為は記号 symbol の体系によって伝達されるものであるということである。だからトゥレーヌにおいては社会的行為を社会的規範の制度化された体系に対する行為者の適応ということには還元されてはならない<sup>(7)</sup>ものである。社会的行為 aition sociale が社会的慣行 conduite sociale と区別されるのはこのため<sup>(8)</sup>である。

トゥレーヌによると社会的行為を把握するためには行為者を一定の状況に位置付けるやり方では充分ではない。なぜならば、それは行為者と状況との絶対的な区別を含意しているからなのである。社会学が従来最初にぶつかった社会という概念も分析にとっては危険を含んでいる。<sup>(9)</sup>というのはそうした概念はつぎのような幻想をおこさせやすいからなのである。「社会的実践によって与えられている具体的全体は分析に対して自然的枠をなしており社会というものはそのすべての要素が相互依存的で一つのかたい骨組をもった構造物である。—このためこの骨組は時には構造とよばれるのだが—そしてこの構造がすべての個々の社会的事実の位置と機能を理解することを可能ならしめるのである」。しかしこのような考え方は結局社会の客観的要請 exigences objectives と一般

(4) A. Touraine, Pour une sociologie actionnaliste (Archives Européennes de Sociologie, 1964. No.1 p.3.)

(5) ibid.

(6) Sociologie de l'action p.8

(7) ibid.

(8) ibid, p.9. トゥレーヌはまた別のところでは構造機能分析による社会学は社会的現実についての研究ではなく、conduite sociale についてのそれであるという (Pour une sociologie actionnaliste. Archives Européennes de Sociologie 1964 No.1 p.4)

(9) Sociologie de l'action ibid.

的に規定された人間の要求 *besoins humains* の不毛な対立を認めているにすぎないのである。結局トゥレーヌの意味する行為 *action* とは社会的状況に対する反応としてのみ扱えられるものではなく、創造 *créations*, つまり価値の創造として扱えられるものなのである。つまり社会的行為を主体的に把握することこそ行為を真に把握することになるのである。トゥレーヌにおいてはこの主体的把握は歴史的主体の発見を意味するもので、それこそ社会学の基礎にあるべきであると考えられる。だから彼は「行為主義 *actionnaliste* の社会学の目的とするところは主体が行為にどのように自己を投入しているか、つまり行為者が生きた社会的関係 *rappports sociaux* というフィールドを構成しているのかを理解することである」<sup>(10)</sup> ともべている。こうした行為についての理解、主体的分析の発見は、社会的価値の存在理由を行為の条件の中においてみようと試み（実証主義的 sociology などみられる）や価値を行為者からきりはなしてそれ自体で存在するとみる見方に対して、非常に重要な意味をもつものなのである。さて、トゥレーヌにおいては行為のみが価値を創造することができるのであって、行為は状況に還元されることもできなければ、状況によっても説明されることもできないものである。もちろんこれと反対に価値を時間を超越した天上界におきそれを行為からきりはなして定義しようとする観念論 *idealismes* の試みは全く独断的といわざるを得ないのである。ところで、価値が行為によって創造されるとするこの創造の主体は一体何人なのであろうか。この主体がトゥレーヌにおいては個人的行為者ではあり得ないことは当然のことである。それはたんに個人としての一私人の創造力と社会における価値の構成する全体とは余りにも均衡のとれないものであるというためだけによるのではない。説明されるべき価値とは常に必ずしも意識的なものであるとは限らないし、かつまたそれが一行為者の行動にすっかり集約されているこ

ともないのである。価値は集団的 *collective* である。それは多くの個人を媒介として屈折されているばかりでなく、集団の意味 *sens collectif* を表明しているものである。トゥレーヌは人間は自己の歴史を作っていくものであり、人間は包括的な意味をもつ企図 *entreprise* に参加しているという要請を提示している。それからすると価値の創造を理解しようとすることは制度や規則の論理の背後に歴史的行為の体系の *dynamique* を発見することになるのである。機能主義分析においては社会体系 *système social* の概念が中心的役割を演じていたが *actionnaliste* の理論、分析においてそれに匹敵する役割を果たすのは社会運動 *mouvement social* という概念である。<sup>(11)</sup> ここでいう社会運動というのは歴史的主体を含むすべての行為 *action* を意味するものである。そしてこの歴史的主体が行為者であるのはその行為が支配 *contrôle* と創造 *création* の二つの要求に応じている限りにおいてなのである。歴史的主体は社会運動の *unité totalisante* として行為主義の分析 *analyse actionnaliste* には当然指定されるものである。ところでこの主体は行為の中においてのみ現存するのであってその行為とは非社会的世界 *le monde non social* に対するはたらきかけとしての労働 *travail* なのである。この労働はマルクスのいう、自然と同時に人間をも変えていく原理としての労働でもある。しかしこの労働は単に技術的な面だけをさすのでもなく、またマルクスにおけるように生産関係を重視するのでもない。むしろそれはマルクスのいう実践 *praxis* と同じような広い意味をもっているのである。創造的活動としての労働とはトゥレーヌによると、人間を自然と対比せしめるだけでなく、人間を自然の中におく組織化的知性 *intelligence organisatrice* なのである。<sup>(12)</sup> この労働についてトゥレーヌの規定しているところをも少し詳細にみるとつぎのようである。(→)創造的経験としての労働は社会を構成していくものであるという意味では社会

(10) *Pour une sociologie de Sravail* (p.11). なお注意しなければならないのは Touraine のいう *rappports sociaux* でそれは *relations sociales* とは区別されていることで、後者は形式社会的な意味での関係あるいは公的な意味での関係で前者はむしろ主体的なまじわりを意味している。

(11) *Pour une Sociologie actionnalitie* p.7.

(12) *Sociologie de l'action* p.12. トゥレーヌはいう

的ではあるが、状況によって負わされるであろう自然法則を意識することに還元されるものではないという意味では社会的ではないのである。そして労働は自らにのみ意味の根源をもつ人間活動であり、それは行為の規範的志向の個別的体系を限定している。(13) (二)労働によって人間は自然から社会的世界をつくり出し、それを自然と対抗せしめる。ここで社会的世界というのは人間のつくりだしたもの *oeuvres* の世界である。人間はこの自分のつくりだしたものととの関係——それは常に創造と従属の関係である——において自己を意識する。だから労働はこうして社会的条件によって決定されかつまた社会的条件を決定するものとして現れるのである。だから労働についての研究は歴史の発展の中におかれているというよりはむしろ歴史を組織する作用をもっているといえる。(14) こうして労働の定義の中には創造 *création* と支配 *contrôle* の二つの要求が含まれているのである。それはたんに生産者のその生産物に対する権利だけではなく一般に行為が産物、所産 *oeuvre* となって外在化し、自己の外在化を回復しようと努める運動のことを問題としているのである。この創造と従属の二つの関係は人間とそのつくったもの *oeuvre* との一般的関係であって、そこに弁証法的関係がみられる。このようなトゥレーヌの概念規定、考え方は非常に複雑きわまらないものであり、哲学的なひびきさえもっている。(15) しかしトゥレーヌが強調していることは主体—労働が社会的産物 *oeuvres sociales* と社会関係 *rappports sociaux* の原理であるということであり、それが社会体系や記号の体系 *systèmes symboliques* の存在理由となるものなのである。この歴史的主体はたんに人間と自然との出会いと解されてはならない、それはもっと深い実存的 *existentiel* なものなのである。歴史的主体は歴史をこえたもの *transhistorique* なものであり、それは全体化的努力 *effort totalisant* の源泉でも

あるのである。この主体に対して労働がおかれている状況は歴史的である。だから人間の自然に対する依存度や人間が創出する産物 *oeuvres* の網の複雑さの度合にしたがって、創造の形態や支配の可能性は変わってくるのである。産業社会 *société industrielle* はトゥレーヌのいう行為主義的分析 *analyse actionnaliste* が適用されるのにもっともよく適合した社会であるが、そこでは社会的行為 *action sociale* が物的必要の圧力におしつぶされることがもっとも少いのである。(16) つまり、産業社会は自らの力で指導し、方向づけるのに適した社会であるから、そこでの中心問題は社会生活の有意的な組織なのである。窮極において社会的行為 *action sociale* は自分にきいて決定するよりほかに仕方がないことになるのである。(17) つまり、工業化がすすみそれが有意的となればなるほどそれは歴史的行為の体系に反省を求めることが多くなるものなのである。

しかし注意されなければならないことは、行為主義的分析 *analyse actionnaliste* は決して歴史的主体を実現させるべきものであると考えられてはならないという点である。トゥレーヌによると、いかなる個人的行為者も彼自身では歴史的主体を具現することはできない。ただ個人的行為者はその行為が全体性を目ざしている限りにおいて主体的負荷 *charge subjectale* をもっているといえるのであって、その意味において個人的行為者は歴史的主体に対して参加という関係をもつのである。そうした歴史的主体への参加をもつ限りにおいて個人の行為は計画 *projet* といわれる。だから *projet* とは個々の行為者の意図なのではないし、またそれは心理的事実とか経験的所与でもないのである。そうではなくて、計画 *projet* というのは行為者が歴史的主体を限定している志向体系へのかつわり合いの度合をいうのである。トゥレーヌの行為主義的分析 *analyse actionnaliste*

(13) *Sociologie de l'action* p.119—120

(14) *ibid.* p.120

(15) このことは Touraine 自身でも認めている。Raison d'être d'une sociologie de l'action (*Revue française de sociologie* 1966 No.4 p.523)

(16) *ibid.*, p.13

(17) J. D. Reynand, Une sociologie de l'action est-elle possible, (*Revue française de sociologie* 1966 p.512)

の原理は大体上述のようである。彼はそれにもとづいて、階級や組織 *organisations* の問題の解明にもりかかっていくのである。

### 3

トゥレーヌは上述したように社会的行為 *action sociale* の主体的負荷を説明するために労働という概念を用いたのである。しかし、そのことはトゥレーヌの行為主義的分析が *sociologie du travail* に対する一般的な考察にすぎないものであると解することを認めるものではない。それはむしろトゥレーヌにとっては社会学的分析の基礎となるべきものである。だから、それをたんに産業の領域とか労働にのみ適用されるものと見る考え方は容認されないのである。人間の労働が明瞭に主体とその所産 *oeuvres* の弁証法を表示していることは明白なことであるが、行為主義分析の原理は労働だけに適用されるのではなく、社会学分析の基本的主題である他の問題すなわち人間と人間の結合関係 *sociabilité* および人間とその自我 (*rapport de l'homme à soi*) すなわち意識と肉体との関係にも適用されるものなのである。<sup>(18)</sup> つまり労働の場合における創造と支配の二つの態動は結合関係すなわち自己と他者との関係においては、(1)自己が他者を指定しそれを認識する(2)そして自己は他者との関係を限定すると同時に他者を自己に適合させる (*me le réapproprié*) の、二つの運動である。<sup>(19)</sup> また意識と肉体との関係においては創造と支配の運動は感情と意識の弁証法ともいわれるものである。それは具体的事例をあげれば快楽と悲劇 (*plaisir et tragédie*) の弁証法である。それはまた自己が生物的存在としての現存を指定し、しかも自らをこの生物的存在の所有者として限定する動きともいうことができるのである。この場合イデオロギー的態度 *Conduite idéologique* を *passion* 感情と命名し、ユートピア的態度を理想主義 *idéalisme* ということができる。トゥレーヌはいう。<sup>(20)</sup> そしてこのうち

労働は巨視社会的な主題なのであるが、他の二つの主題は微視社会的なものとしてパーソナリティに関するものであるようにとられるかもしれないが、そう解されてはならないのである。<sup>(21)</sup> というのはトゥレーヌによると他者との結合関係は個人間のレベルにおいても、集団のレベルに包括的全体社会のレベルにおいてもとらえられるものであり、また人間性 (*nature humaine*) はまたたんに個人的なものではなく、社会が快楽や悲劇のいろいろの形態をつくりだしてきたことは民族学の諸々の研究が教えてくれていることである。これらの三つの主題の各々はそれぞれの特有のレベル——すなわち、個人、集団、包括社会という三つのレベル——で展開されるべきであるが、それが交錯することを阻止するものではないのである。もっとも重要な社会現象というのはだから三つの主題にわたっての関連づけを必要とするもので、労働というのはそうした一つの典型的な事例である。<sup>(22)</sup> それで労働は全体社会における活動のほかに関連的な集団の関係において、また人間と労働という関係においても扱えられるのである。

さて、トゥレーヌにしたがうと彼のいう *analyse actionnaliste* は人間の行為を社会的状況に対するたんなる反応として捉えるのではなくて歴史的主体のはたらきとして捉えることを目的とするものである。社会学の沿革をひるがえってみると、19世紀の社会学がはじめ人間の行為について社会的決定要因を探求したことは当時の観念論的な説明に対しては批判的であり、革新的意味があったことを認めることができよう。しかし、その後こうした社会的決定論的な要因を探求する社会学はただ全く平凡な無味乾燥的なものとなり、そこには感激も、生気もない現状に対する正当化と黙認しか残らなくなって今日に及んでいる。これに対して新しい社会学の試みがなされてきている。とくにそのうち有力なのは機能主義的分析であるが、この機能主義によって古典的社会学に取り代

(18) pour une sociologie actionnaliste p.9 10.

(19) *ibid.*, p.9

(20) *ibid.*, p.10

(21) *ibid.*, p.10

(22) *ibid.*, p.11

ろうとするのは愚かなことであり、それによって古典的社会学の短所を救うことはできないのである。actionnaliste の目的は「主体の行為への主体的介入を理解すること」<sup>(23)</sup>にある。だからこの社会学は価値を研究する社会学ではなく、社会関係 *rappports sociaux* の領域を構成する限りにおいての行為を研究するものである。それは、しかし機能主義的分析を否定するのではなく、それを補うものなのである。それ故、社会体系や社会的挙措 *conduites sociales* の研究は *analyse actionnaliste* の自然の補足となるのである。<sup>(24)</sup> 行為の主体的意味が社会的価値や個人や集団がそれに社会化されるべき制度化された規範に変えられるとき、*analyse actionnaliste* から機能主義的分析への移行が成立するのである。<sup>(25)</sup> しかしこの移行は一般的に規定することはできないのである。というのはこの移行は考察される主題とそのレベルに応じて変らなければならないからである。そこでいまその移行を社会階級の問題に限って考察してみることにしよう。そのことはまず階級概念そのものを分析することが必要であるということの意味するのではない。そうではなくて、階級という概念に支えられている位置付けを理解することが必要なのである。そのため少くともその分析要素を示していくことが必要となるのである。<sup>(26)</sup> 一体労働者の要請 *exigences* からどのようにして階級という概念を導入できるであろうか。まず階級について考えるとき指導者 *dirigeants* と被指導者 *dirigés* とが存在するといえるであろう。このうち被指導者は組織を通じて主体を追求するのであるが、彼等は一方ではこの組織に参加することを求める。というのは組織とは人間の労働とその作物との仲介 *médiation* であるからである、ところが彼等はまた組織に対して要求を提出する。なぜなら組織は主体の個別的な利益を擁護す

る、個別的な社会的全体 *ensemble social particulier* であるということによって彼等に対しては障害ともなるのである。<sup>(27)</sup> これに対して指導者たちは革新者であり、創造的労働の代表であるのだが、同時に指導者たちは個別的全体のイデオロギー的擁護につとめる統合者 *intégrateurs* でもあるのである。<sup>(28)</sup> 組織のこの二つの動き、二つの弁証法こそが社会階級の二つの弁証法へのモデルとして役立つのである。しかしここでいわれているのは否定的な弁証法である。産業社会より以前の社会は自らをその行為の産物として把えることはできない。そしてそうした社会において労働者は自らを直接創造者として把えることはできない、そして社会秩序的構成の原理を自分たちの、すなわち社会の外にあるものとみるのである。<sup>(29)</sup> しかし労働者は彼等の特質 *identité*, を——それは労働者の支配の意欲の反対の形であるが——擁護しようとする。それ故に彼等労働者は自分たちと事物の世界の間に巨大な中間物 *entre-deux* を認めるのである。この中間物は事物界と自らを同一化しながら、その権力を正当化するためその秩序を利用するとともに創造の作物がつけられるための手段である財を蓄積するのである。だから階級の関係とは事実の関係ではなくむしろ労働者の疎外の表現なのである。このような社会においては主体の二つの要請は階級の社会に全く物化されている (*réifié*) のである。これに反して産業社会へ移行してくるにつれて、社会秩序の形面上学的な保証はだんだんと消滅してくるのである。そして組織の二つの弁証法となろうとするものと社会的財の不平等な分配とは分離してくることになるのである。<sup>(30)</sup> だから産業社会以前の社会においては社会階層の機能的分析は階級関係の *analyse actionnaliste* と緊密に接合していたのに対して産業社会においては機能的分析は権力の *analyse*

(23) *ibid.*, p.11(24) *ibid.*, p.11(25) *ibid.*, p.11(26) *ibid.*, p.12(27) *ibid.*, p.12(28) *ibid.*, p.12(29) *ibid.*, p.12(30) *ibid.*, p.13

actionnaliste から漸次分離していくのである。そしてこの結果、権力の存在と結びついた不平等な制度と産業の生産機能遂行によって要請されるたんなる階層的分化の調停的メカニズムや、制度についての社会学が漸次自律性を与えられてくるのである。(31) どんな社会にも実際 社会的地位の不平等が存在するとき、この不平等に対する適応が伴わなければ、機能を遂行することはできないのである。たとえば、社会的体統の下層にある個人の職業上または経済的な願望が上流階層成員のそれに比べて低くなければ、社会の機能は営まれない。そして下層者の願望水準の低いことは多くの研究によって証明されている。しかし被指導者層はたえず指導者層に対して、彼等のおかれている依存状態について平等の名において不満を訴えている。この平等の名においてというのは主体の名においてと同じことであるが、こうした要求は時によりその強さも異なりまたその範囲も広狭の度を異にするのであるが、とにかく、不平等への適応と同時にこの平等への要求も常に一般的に見られるところなのである。すなわち、社会の成員の各人は一方において現状が不平等であることに対して不満を抱くと同時に現状はかくの如くだからというあきらめも抱くのである。それでこの二つの声は妥協していることが多いが、この妥協は社会階層体系 *Système de Stratification* が一つの社会秩序として認められていることによって現れている。そして指導者層の権力が正当であると認められる限りにおいて不平等は承認されることになるのである。この点こそ *analyse actionnaliste* と機能主義的分析の間のある程度の連続性——それは常に部分的な、限られたものでしかないが——を保証するものなのである。(32)

そしてこの連続性を表示しているのは職業に見られる威信の尺度の存在であるとトゥレーヌはいう。たとえば産業社会において経営の指導者は労働者よりも高い地位にあるとみられる。このような不平等は社会の機能遂行の不可欠な要件の一つであるが、それが承認されるのは部分的でしかないのである。というのは産業社会が異なるにした

がって、それぞれの階層体系間には大きな相違が存在するからなのである。こうして機能主義的分析はそれに先行する *analyse actionnaliste* に対して常に結びつく門戸を開いていることによって認められることになるのである。そして機能主義的分析を主張するすぐれた社会学者においてこの門戸は常に開放されているのである。

歴史的行為から社会的体系への移行はまた社会的慣行 *conduites sociales* のレベルにおける同じ移行を伴っているのである。*actionnaliste* の見地からわれわれは価値の目標 *visée* が社会関係 *rapports sociaux* の体系にどの程度深くかかわりあっているかにしたがって *conduites sociales* のレベルを限定できるのである。組織研究において用いられ用語にしたがっていうと、労働者は引退の立場に身をおいて、敵対的であり、非人間的の世界と見られる組織に抗して主体に訴えることもあれば、労働者は組織において個人的目的の追求だけに精を出すこともあるし、また労働者はもっと積極的にかかわりをもち集団と連帯を強く感ずることもあるし、さらにまたもっと進んで組織に抗して組織自体の目的に訴えかけたり、経営管理層に抗して合理性に訴えかけることもある。

こうした分析は所与の社会的状況における態度や表象についての研究と異なることは明かである。この点についての具体的な例証をトゥレーヌは移動 (*mobilité*) について行っているが、次にこれみていくことにする。

大量的な移動は移住であれ移出であれ、移動する人口が適応すべき社会の状態を変化させるものである。だから移動する人口の統合ということは必然的に一つの創造であり、新しい活動領域をつくることになるのである。そこで農村から流出した労働者の大群は時には古い昔からの中心になる労働者の群を全く埋没させることになることがある。これら農村出身労働者の群は根なし草の、組織のない、デマや煽動に動かされやすい大衆にすぎないか、あるいはその生活に執着しながらも、社会、社会関係、社会運動の革新の意味を内包する存在であるか、のどちらかである。 *analyse*

(31) *ibid.*, p.13(32) *ibid.*, p.13

actionnaliste は移動に対して労働者を後者の見方からとらえるのである。このようにみると、階級意識というものも、私的な要求 *revendications* の原理と大規模工業の合理的組織とともに現れた全体性 *totalité* の原理との合流として定義されるのである。(33) このようにして労働者の意識もたんに労働者の状況に対してもつ態度の総体として把握られるのではなく、労働の状況に対して労働者の与える意味として分析されるのである。行為の社会的領域を構成する活動、つまり状況に対して反応するだけではなく、社会生活をつくり出していく活動と所与の領域においてみられる態度の関係はきわめて複雑であることはたしかである。しかし *analyse actionnaliste* にとってはそうした二つの視点があるとしてこれを区別し、併置させるだけに満足してはならないのであって、なんらかの仕方で両者を結びつけることが必要なのである。一般的にいえば *analyse actionnaliste* は社会運動の研究と体験的な計画 *projet* の研究の二つの面をもっているがこれが機能主義的分析における社会体系の研究と意志決定の研究の二つに対応しているといえるのである。(34)

なおトゥレーヌはその分析と構造主義的分析 *analyse structuraliste* との相違についても触れている。トゥレーヌによると 構義主義者(35) は社会科学における客観性を重視するあまり、社会科学をあたかも人間についての自然科学のように扱っている。(36) これに対して *actionnaliste* はドイツの文化科学の認めた価値や意味の区別を重視してその主張を保持するのである。しかしだからといって *actionnaliste* は構造主義者と全く断絶しているのではない。構造主義は社会科学と社会的数学がもっとも緊密に結びついているところに、位置づけられるのである。だから主体への参照がより直接的な領域に近づくにしたがって、行為の主体的意味の喚起と操作の方法の方式化とは分離

してくるのである。そのような分離の必然性をすぐれて示しているのは経済学的分析である。また所産の領域がうすく、主体が実践によってではなく存在そのものによって自己を強く表わすにつれて、社会学的方法と数学的方式化の体系との分離は減少してくるのであって、その場合構造の概念は重要性をもつることになる。すなわち、精神の機能遂行の法則の研究が重要性をもってくるのである。このようにして、*actionnaliste* の方法は機能主義的方法や構義主義的方法ときわめて緊密な関係をもっているのであるが、それらとは別の独自性をもっているのである。それぞれの方法の独自性を明かにすることなく、すべてを同一の概念の枠の中に統一しようとすることは誤りであるばかりでなく、全く不毛な努力にすぎなくなるのであろう。

## 4

トゥレーヌの *Sociologie actionnaliste* は上に略述したような方法論的主張にもとづいて、産業社会の具体的問題の説明に発展している。(37) しかしここではそれらの具体的問題にまでこれを追いかけていく余白がないので、方法論の要点を略述した段階でその問題点を指摘することにしよう。トゥレーヌの行為の社会学は結局のところ社会的行為を相互行為 *interaction* としてではなく、労働 *travail* から理解しようとする試みなのである。そしてこの労働は歴史的主体 *sujet historique* として全体性へのよびかけ *l'appel à la totalité* としての意味をもつものとされるのである。このように歴史的主体を社会学にもちこもうとする試みは科学というよりは歴史哲学的な企てではないかという反論を招いている。トゥレーヌ自身もこうした反論を予想して次のように答えている。「労働を歴史的主体とする社会学はたしかにその発想は歴史的なものである。というのはは

(33) この点について Touraine は 1966 年に刊行された労働者意識 *La conscience ouvrière* において詳しく論じている。

(34) *ibid.*, p.15

(35) 構造主義者としてレヴィ・ストロース *Lévi-Strauss* の考え方の立場にたつ人々のことを指すものである。

(36) *ibid.*, p.16

(37) Touraine は産業社会 *société industrielle* というよりは産業文明 *civilisation industrielle* という言葉を用いている。



働とは人間がその環境と自分自身を変えるところの方法であるからである。しかしながら、この社会学は直接客観できる事実や社会的発展のレベルにおいては見られない分析の原理を用いようとするのであるから純然たる歴史的なものではない。とくに、この社会学は決して具体的な歴史的な所与を説明しようと考えていることはなく、ただ現実から一定数の関係を抽出することを旨とするだけである。この点においてすでにこの社会学は歴史哲学を脱却しているのである。」と<sup>(38)</sup> また、*analyse actionnaliste* はあるレベルにおいては抽象的な原理に基づくのではなく、産業社会においてしか明瞭に現れることのない行為についての考え方に基づいたある種の解釈を求めようとしていることも否定できない。このことは歴史哲学のもっとも一般的な特性の一つである、過去を現在の問題を基準として再解釈しようとする試みを再導入することにならないのであろうか。つまり一体どういう理由によって今日の産業社会を歴史の目的とすることができるのであろうという問いがなげかけられるのである。この問いは一部分正しい理由づけをもっている。たしかに *Sociologie actionnaliste* は産業社会にぞくするものであり、産業社会を西欧の工業化の例外的な条件にきわめて敏感な古い考え方と対比して明かにしようと努めているものである。その意味において産業社会を歴史的な分析の目的とみるのは当然のことである。歴史家たちは価値体系が継起していく様子を観察しているが、基本的な事実「行為は規範的に志向している」の分析を行っていない。歴史哲学が導入されるのはこの本質的事実を直接考察することがなされていなかったためである。*analyse actionnaliste* はこの事実の分析を出発点とするのだから哲学的ではなくするのは当然であるとトゥレーヌは答えるのである。<sup>(39)</sup> トゥレーヌのこのような回答にもかかわらず、彼の構想とその表現の中には哲学的な色彩が濃厚であることは否定

できない。*Sociologie de l'action* の書評において、W. Ackermann と S. Moscovici はトゥレーヌの *Sociologie actionnaliste* を実存主義的であるとし、その試みは瞬昧であり、かつまたその社会学は科学的理論というよりはむしろトゥレーヌ自身が排撃している超越的理論 *méta-théorie* となっているといった方が適していると評している。<sup>(40)</sup> たしかにこの批評は核心をついているといえよう。また J. D. Reynand もこの社会学はあまりにも *déroutant* (人を面喰わす) なものであると評しているが、<sup>(41)</sup> その表現と論理の展開にはきわめて補捉しにくい点を多く含んでいる。しかしその点はおいておこう。トゥレーヌ自身上述したようにその分析の企ては歴史哲学的ではないと主張しているのであるからそれに従い、それを認めていこう。しかし問題は彼のいう価値の意味である。トゥレーヌによると行為のみが価値をつくり出すのであって、この行為は状況に還元することもできなければ、また状況によって説明できないとされる。行為はたしかに状況に対するはたらきかけである。しかし価値とは行為によってつくり出されるだけなのであろうか。たしかに革新的行為によって新たに価値が創出されることはありうる。しかし価値はすべて行為によってつくれるより前に、逆に価値が行為を規定している面も多いのではないのであろうか。価値の創出をする行為というのは特別な人格においてみられるものである。それはトゥレーヌのいうように労働というはたらきによって創り出されるものとはいえないのではないだろうか。労働によって経済的な価値は創り出されるであろう。しかし人間のもつすべての価値は労働によってのみ創りだされるのではない。また歴史的主体として大きな意味をもつ労働ということの意味も明確さをかいているようである。D. Reynand たちも指摘しているようにトゥレーヌにおいては労働は時には生産する *produire* と同意語に用いられている。<sup>(42)</sup> *Sociologie*

(38) *ibid.*, p.17(39) *ibid.*, p.19(40) W. Ackermann et S. Moscovici, *La sociologie existentielle d'Alain Touraine*, *Sociologie du Travail* 1966 No.2 p.208(41) J. D. Reynand et P. Bourdieu, *Une sociologie de l'action est-elle possible?* *Revue française de Sociologie*, 1966. No.4 p.508(42) *op. cit.*, p.508—517

de l'Action にははっきり *Le travail bumain est production* (人間の労働は生産である) という表現が見られる。(43)この点について Touraine 自身は否定しているが、(44) 実際彼の書いている文章にはあちこちに労働と生産とはほとんど同意語のようにして用いられているのを少なからず見かけることができる。その点で労働 *travail* の定義はあいまいであるが、価値を創り出すという意味もっていることを考えるとこの価値は文化的な基準ということではなくて、経済財の交換価値あるいは使用価値をも含んでいるように思われる。そういう点に概念規定の混乱があるのではないかと考えられるふしが見られる。だから労働と生産の区別が明確にされる必要があるといえるであろう。

しかしながら、もっとも重要と考えられる点は *analyse actionnaliste* と機能主義分析や構造主義分析との関係である。トゥレーヌはその主張する分析方法は機能主義や構造主義にとり代るものではなくそれらと緊密に結びついており、それらを補うものであることを強調している。筆者はその点についてトゥレーヌの説いているところを略述したのであるが、それらは一体どの点において関節するのであるか、またどの点で補うのであるかは必ずしも明白にされているとはいえない。トゥレーヌの発想は彼自らも認めているように歴史的である。歴史的な地盤に立つ分析が体系的立場におけるそれと結びつくことは可能ではあるが、その接合点はまだ少し明確にされなければならないであろう。それらの点についてふれていくためには、実際に彼の行っている組織や社会運動についての分析を詳しく検討していかないと中核的な点を具体的に指摘することは困難であるから、その点は別の機会に譲らなければならない。ただここで指摘しておきたいことは、主体が外的環境あるいは状況に対してたんに呼応するだけではなくてそこに創造していくとして、この創造の作用と状況に対する適応の作用とはどのように関係し、接合していくのかという問題が残っているというこ

とである。

その点についてトゥレーヌの行っている説明は充分納得できるものとはいえないように思われる。そうした点からすると、J. D. Reynand と Bourdieu が行為主義の社会学は可能であるかと(45) いう問いを出していることは深い意味もっているのである。たしかにパーソンズ T. Parsons の社会体系の分析においては価値は常に与えられたものとして措定され、しかも常数として位置づけられているため変動の説明を十分に発展せしめることができなかつた憾はある。その意味でトゥレーヌがパーソンズなどの機能主義的分析を克服する意図で *actionnaliste* の主張を展開したことは注目すべきものであるといえるのである。しかしながらそうした敬服に値する努力であるにもかかわらず、その試みはまだ十分に結実するにはいたっていないといえる。トゥレーヌの理論化の試みはこのように成功しているようには見えないが、しかし彼がいわゆる産業文明に関する分析においてとくに労働運動の発展に関して行っている理論化の企図はこうした問題についての説明には記述的なものが多い、だけに注目に値するものであり、また現実の説明にも役立つものを含んでいる。

産業の著しい高度な発展にともなう人間の力や意志が漸次低い位置におかされようとし、機械の体系や巨大な組織の拡充があまりにも大きな力をもとうとしている時代において、トゥレーヌの *sociologie actionnaliste* は人間の自由についてその確立を可能ならしめる条件の社会学ともいふべき意味もっている。その限りにおいて、それは社会決定 *déterminisme social* に対して人間の自由 *liberté humaine* の確立につとめたギュルヴィッチ G. Gurvitch の社会学と同じ方向を目標しているものである。そしてそういった意味においてトゥレーヌの社会学のもつ意義は十分に認められなければならないといえる。

(43) *Sociologie de l'Action* p.128

(44) A. Touraine, *La raison d'être de la Sociologie de l'action* (*Revue française de Sociologie*, 1966. No 4) p. 518—527

(45) J. D. Reynand et Bourdieu, *op. cit.*